

【月刊】キリスト教書評誌

# 本のひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2023年6月1日発行（毎月一回1日発行）第786号

June  
2023 6

● 出会い・本・人

恐る恐る手にした新約聖書 小林正継

● 特集 若者と一緒に「聖書・キリスト教・信仰」について考えるなら

この三冊！ 竹ヶ原政輝

● 本・批評と紹介

増田 琴著 マルコ福音書を読もう 渡邊さゆり

本城仰太著 使徒信条の歴史 大石周平

J・L・パレット著／松島公望監訳／矢吹理恵、荒川歩 編訳

なぜ子どもは神を信じるのか？ 芦名定道

オリゲネス著／出村みや子訳

キリスト教教父著作集第10巻 オリゲネス5 津田謙治

芳賀 力著 神学の小径V 朝岡 勝

H・W・ホーランド著／池永倫明訳

コリント人への第一の手紙Ⅱ・Ⅲ 吉田 隆

ヘンリ・ナウエン著／渡辺順子訳／酒井陽介解説

傷ついた癒やし人 新版 関谷共美

金子晴勇著 キリスト教思想史の諸時代 VII 阿部善彦

既刊案内

書店案内

説教黙想アレテア叢書

さん よう もん しん どりく  
**三要文 深読 使徒信条**

日本キリスト教団出版局 編 2023年5月25日刊行予定

「我は信ず」から「永遠の生命」まで22の黙想によって、使徒信条を味わい尽くす。説教者はもちろん、信徒にもおすすめ。小泉健、荒瀬牧彦、朝岡勝、吉村和雄など充実の執筆陣。

◆A5判 並製・216頁・定価2,640円

シリーズ  
好評発売中

『三要文 深読 十戒・主の祈り』 定価2,640円



全国のキリスト教書店員が選んだいちばん読んでほしい本 主催/キリスト教出版販売協会

# キリスト教書店大賞 2023

日本キリスト教団出版局からは4作品がノミネート!

## LGBTとキリスト教



### 20人のストーリー

平良愛香 [監修]

四六判 並製・240頁  
定価2,200円

書店員さんのコメント

キリスト者として他者と  
共に歩むには……を考える  
きっかけになる1冊。

## 老いと祝福



石丸昌彦 [著]

四六判 並製・216頁  
定価2,420円

書店員さんのコメント

病と老いはだれでも不可  
避です。ポジティブに生  
きる指針に感銘。

## 使徒信条 光の武具を 身に着けて



平野克己 [著]

四六判 並製・128頁  
定価1,430円

書店員さんのコメント

とてもわかりやすく、使徒  
信条を解説しています。  
読書会にも最適。

## 八木重吉 家族を詩う



日本キリスト教団  
出版局 [編]

A5判変型 並製・80頁  
定価1,320円

書店員さんのコメント

重吉の詩にはじめて触れ  
る若い人にも、ぜひ手  
にとって欲しい1冊。



## 恐る恐る手にした新約聖書

小林正継

私は田舎地域に生まれ育ったので、近くに書店が無かった。また書店に行つてまで買いたいと思う本もなかった。だから逆に、高校二年の夏の学校帰りに、自らの意志で書店に寄つて購入した本の記憶が鮮明に残っている。その本とは新約聖書である。私は、ラジオのキリスト教番組でキリスト教に出会い、隣人愛という高尚な徳に感動し、その源が新約聖書という本に書かれていると知つたので、買つて読みたくなつたのである。

書店の宗教コーナーに旧新約全巻が入つた分厚い聖書が目についたが、私にはイエスの愛の言葉が書かれている新約聖書だけでよかった。薄くて定価が百円の、日本聖書協会刊行の口語訳新約聖書が見つかった。カバーの挿絵の一部分が金色で目立ち、本の中身である天、地、小口部分が金色に装飾されていた。「なんと、宗教臭い本！これを読んだら洗脳されてしまうのだからどうか？」と一瞬ためらつたが、「聖書（聖なる書）」という言い方をしている本だから普通の本と違って当然！それを買いた

くてここに来たのだ！」と思い、恐る恐る手に取つてページをめくつた。

紙が一般の本と違って薄かった。ページ数の多い聖書だから、薄くて丈夫な紙を使うことに、今は違和感はないが、当時の私は、この薄い紙の使用にも宗教臭さを感じた。ラジオ放送で聴き始めていたとはいえ、キリスト教は未知の宗教であり、怖さも感じていた。しかしわざわざ買っていくという行為を導いた本である。私は人目を気にしつつ、自然な感じを装いながら、新約聖書を買つた。これがキリスト教書籍を買つた最初である。帰宅後、その文体に戸惑いを覚えながらも、一気に読み通した。隣人愛の言葉に改めて感動し、その後繰り返し読む本となつていった。

（こばやし・まさつぐり八木重吉の詩を愛好する会事務局）



# 若者と一緒に『聖書・キリスト教・信仰』について考えるなら ▼この三冊！

## 竹ヶ原政輝

(たけがはら・まさてる・日本キリスト教団高の原教会牧師、  
同志社大学嘱託講師)

大学で聖書の講義を担当するようになって間もなくの頃、私の授業を聞いていた学生の一人から「先生は本当に楽しそうに聖書の話をするね」と言われました。私は聖書ほど面白い本はないと思っています。なので、大学で若者に聖書の話ができることがうれしくて、楽しくて、大好きなのです。そういう意味では、若者と一緒に読みたいのは、何より『聖書』です。しかし、それではお題に応えたことにならないようなので、そのことも踏まえつつ、

三つのテーマに基づいて若者と分かち合ってみてはどうかと思える本を紹介します。

最初に、「若者と一緒に〈聖書〉について考えるなら」というテーマになりますが、A・E・マクグラス著『旧約新約聖書ガイド 創世記からヨハネの黙示録まで』(本多峰子訳、教文館刊)はいかがでしょうか。そもそも聖書とはどういう文書であるのか、また聖書を読むときに気をつけておきたいことなどに触れられている「第1部 序

論」はタイトルどおり良い「ガイド」になると思います。「第2部 聖書注解」では、聖書の各文書の大まかな内容を知ることができます。面白いけれども読みやすいとは言えないところもある聖書というものに挫折しないためには、アウトラインをつかんでおくことが有益であると私は考えています。この本は「第3部 資料」の部分も含めて、その助けになると思います。聖書そのものの巻末についている「付録」とあわせて活用したいところです。注解の合間に挿まれている「コラム」には、聖書を読んでいると浮かんでくると思われる様々な疑問が取り上げられています。そこに書いてあること自体から必ずしもスッキリとした回答を得ることはできないかもしれませんが、自分たちはそのことについてどう思うかという語り合いのきっかけを与えてくれるものではないかなと思います。

ます。「そんなこと考えもしなかった！」という人には、より積極的にならば、聖書を読むための読み方のコツのようなものを教えてくれるものとして機能するかもしれません。

先ほど述べた「アウトライン」については、この本の場合、**「文書」ということ**になるかと思えます。もう少し『聖書』全体のあらすじをつかむという意味では、拙著『読める、わかる、聖書のストーリー』(キリスト新聞社)がお役に立てるかと思えます。

さて、続いては「若者と一緒に〈キリスト教〉について考えるなら」というテーマですが、N・T・ライト著『すべての人のためのマタイ福音書 1』(大宮謙訳、教文館刊)を挙げたいと思います。これは「この一冊」というより、「このシリーズ」を期待を込めて、取り上げます。

聖書そのもののガイドラインという

よりは、一歩踏み込んだ「説教」を読む感覚で、個別のテキストについてより深く考えることができます。聖書テキスト(私訳)に続く説教の「マクラ」に当たるような本文の導入部分にはピンと来ないものがあるだろうとは思いますが、テキストの背景、複数の解釈の可能性などが程良い長さにとめられており、聖書の言葉の分かち合いのきっかけとしても適しています。

本書において聖書から導き出されているキリスト教的発想や、言葉遣いは、若者との対話において格好のテーマとなるでしょう。例えば、著者はイエスの奇跡と「権威」というものを結びつけて語ります。これは私には同意できるものですし、講義でもそのような考え方を紹介してきました。すると、この「権威」という言葉が「イヤな感じだ」と、拒否感や嫌悪感のようなものを示すリアクションをされることが

あります。聖書協会共同訳が神から人間への語りかけに「お前たち」ではなく「あなたがた」という訳を選んだのは、最近の若い人には上から目線の物言いを受け入れられないだろうと判断したためと聞きましたが、こちらには私は同意できていません。しかし、事実そのような感覚を若い世代は持つっており、そこに「対話」の必要性和、「対話」していくことの意義もまた感じるのです。

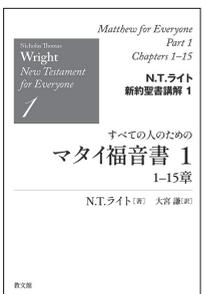
その他、最近の学生たちが、よく引つかかっているのは、マタイによる福音書20章の「ぶどう園の労働者」のたとえや、ルカによる福音書15章の「放蕩息子」のたとえです。前者は、少し前にネット上に散見された「自分が特に損をするわけでもないのに他人が得をするのが許せない人が増えている」という話と一緒に扱うと、「わかる」という学生が一定数出てき



『旧約新約聖書ガイド』  
——創世記からヨハネの黙示録まで』

A. E. マクグラス：著  
本多峰子：訳  
教文館  
2018年刊  
A5判 734頁  
7,920円

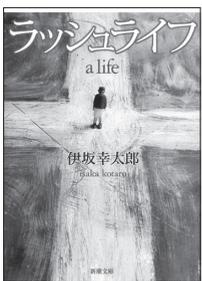
けるためには、「事件」が必要——では、神が神であり続けるためには、メシアがメシアであり続けるためには何が必要なのか……。他の登場人物のパートにも、考えさせられる材料は散りばめられています。まずは一人ずつじっくり考えてみるのもいいでしょう。



『N. T. ライト新約聖書講解 1』  
——すべての人のためのマタイ福音書 1  
1～15章』

N. T. ライト：著  
大宮謙：訳  
教文館  
2021年刊  
四六判 336頁  
3,080円

少なくとも私は考えさせられました。この作品を通じて、「信仰」について、また、それぞれの思い描く「芳醇な人生（ラッシュライフ）」について分ち合ってみてはいかががでしょう。もしかしたら、自分にとってイエス・キリストとは何者なのかといったこと



『ラッシュライフ』

伊坂幸太郎：著  
新潮社  
2005年刊  
文庫判 469頁  
825円

についても深く考える契機となるかもしれない。そうしたら、その問いを携えつつ、『聖書』を読んでみてください。その際、前掲の二書（+拙著）をお手元にどうぞ。

ます。後者はレポートの課題に取り上げて感想を聞くのですが、「兄に同情する」という意見が必ずあり、それは年々増えているような印象を受けています。（そう言えば、聖書協会共同訳では「放蕩」という言葉は使われていませんね。なぜなのでしょう。）ある時期から日本の若者たちが共通して持っている見える「公平」や「平等」の感覚と、これらの個所に表れている「救い」や「神の愛」との間には、どうもズレがあるようです。さて、それらをどう分かち合ったらよいでしょうか。その点について本シリーズの続巻が、良き対話の橋渡しをしてくれることに期待します。

「Z世代」（1990年半ば～2010年代に生まれた世代）と呼ばれる若者の消費の動向は脱物質化の方向にあると言われたりします。これは「キリスト教」の持っているもの、大切にし

ているものが彼ら彼女らに対して響く可能性があることを意味しているのかもしれない。

最後に、「若者と一緒に（信仰）について考えるなら」ということで、おススメしたいのが伊坂幸太郎著『ラッシュライフ』（新潮社文庫刊）です。これはジャンルとしてはミステリーになると思われる小説で、人間の「信仰」について考えるうえでよい示唆を与えてくれる一書です。その特徴ゆえにネタバレになりますので詳しいことは書けませんので、新潮社のホームページにある作品紹介を転載します。「泥棒を生業とする男は新たなカモを物色する。父に自殺された青年は神に憧れる。女性カウンセラーは不倫相手との再婚を企む。職を失い家族に見捨てられた男は野良犬を拾う。幕間には歩くバラバラ死体登場——。並走する四つの物語、交錯する十以上の人生、

その果てに待つ意外な未来。不思議な人物、機知に富む会話、先の読めない展開。巧緻な騙し絵のごとき現代の寓話の幕が、今あがる。面白そうと思われた方——面白いです。とにかく、小説として抜群に面白いという点でおススメしたいのですが、若者にもきつと読みやすいと思いますし、なんなら読んだという人も多いかもしれません。

「神に憧れる青年」のパートから特に直接的に「神」とは何か」「信じろ」とはどういうことか」といった問題提起を受けますが、一つにはそれらを通して「信仰」や「宗教」について語り合ってみてはどうかと思うのです。青年の抱く近寄りがたいものへの「憧れ」がはらむ危うさ。彼を取り巻く「集会」のメンバーたちが抱いた思いは、信仰の暴走なのか、当然の帰結か、あるいは、そもそもそれは信仰ではないのか……。名探偵が名探偵であり続

## 喜びの輪の中への招き 共同体が生み出したメッセージ

〔評者〕 渡邊さゆり



マルコ福音書を読む  
いのちの香油を注ぐ  
増田 琴著



マルコによる福音書からの34の使信が収録されている本書は、著者、増田琴牧師の清々しく確信に満ちた語りが聴こえるマルコによる福音書からの説教集です。著者が生き、生かされている教会、礼拝、聖書研究会、キリスト教学校などの共同体から生み出されたメッセージ集です。マルコ福音書が発信する喜びの知らせを現代日本の文脈の中に埋め込み、新たなエピソードとして語り直されています。

著者はイエス・キリストの福音を歴史的な脈に置きます。福音書の冒頭を預言者からのリレーのバトンを受け取るイエスの物語と描き、著者は「あなたもバトンを受け取っています」(17頁)と読者へ呼びかけます。共同体がマルコ福音書を読み解く背骨、隣人を大切に思う心からの祈りがその肉という著者のスタンスが感じられます。著者はマルコ福音書を使って話すのではなく、みことばにのめり込み読

み解きます。イエスは最も小さくされている人々と出会ったことが語られますが、それは著者とその共同体の信仰のありようの結果でしょう。

著者は豊富な知識を余すことなく丁寧に伝え、イエス・キリストによってもたらされる福音をほどこします。神に仕え、生きようとしたキリスト者の著作が紹介されますが、それは単なる知識供与ではなく、優しい語りでなされます。しかも神学専門書や注解書による「説明の説明」ではありません。その「人」を知ることができると著者が適宜引用されているのでイエスの時代を生きた人々と近現代を生きた人々の両方に出会えます。遠藤周作、ボンヘッファー、詩人デイビット・ローゼンバーグ、榎本保郎牧師から関田寛雄牧師。古代の言葉を読むことと現代を生きたギャップはこのように縮められるのだと教えられます。

ない手法は圧巻です。

最後は「喜びの輪の中に主は一人ひとりを招いておられます」と記されています。私はこの結びから「その招きを妨げているものは何か」という課題を与えられました。私もキリスト教会、団体の中で思い起こすことも耐え難いほどの差別や排除を受けた経験があります。その「つらさ」にたたずむ者をこそ主は招くと信じて、招きを阻む「力」を溶かしてゆこうと思いました。

マルコ福音書を通してイエス・キリストが私たちの生活の中の隅々に共におられることを知ることができるおすすめの一冊です。

(わたなべ・さゆり) マイノリティ宣教センター・駒込平和教会牧師  
(四六判・二五六頁・定価二六四〇円・日本キリスト教団出版局)

本書の特徴はイエスと女性たちとの出会いが描かれることです。十二年間病で苦しむ女性の積極性、シリア・フェニキアの女がこれまで当たり前のこととされてきたことを問う姿、香油注ぎの場面、これらを通して著者は「誰を記念するのか」と問います。この問いからは今なお女性差別が問題にもされない日本社会をサバイブする女性たちが思い起こされます。そして、日本のキリスト教共同体の差別的体質から変革への覚醒につながるのではと期待が膨らみます。イエスの十字架の物語では男弟子たちに焦点が当てられることが多いですが本著では「十字架につけられた女性の像」が紹介されます。続くメッセージで女性たちがイエスの処刑の一部始終を見て仕えていたと語ります。女性たちを取りこぼさず、またヒロインにまつりあげるのでも

日本語で書き下ろす聖書注解

VTJ旧約聖書注解

# イザヤ書

1~12章

大島力●著



シリーズ10巻突破記念  
特価3,960円  
2023年9月30日まで

400以上の箇所が新約聖書で引用され、イエス理解にも多大な影響を与えたイザヤ書。一般的に三つの部分に分けて理解されるこの書を統一された書として解釈する。トピックでは、新約聖書との関連性を鑑みながら「残りの者」「メシア預言」といった重要なテーマを扱う。  
A5判上製・202頁・通常定価4400円

シリーズ好評発売中

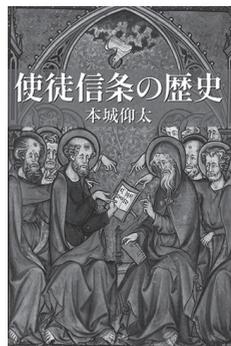
- VTJ旧約聖書注解  
『出エジプト記1~18章』4,840円  
『出エジプト記19~40章』4,840円  
『申命記』8,580円  
『サムエル記上1~15章』7,260円  
『列王記上1~11章』5,280円  
『コヘレト書』3,520円  
NTJ新約聖書注解  
『ルカ福音書1章~9章50節』5,720円  
『ガラテヤ書簡』6,600円  
『エフェソ書簡』5,280円  
『第1、第2、第3ヨハネ書簡』6,600円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail: eigyoubu@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)  
<https://bp-uccj.jp>

「われ信ず」と告白する  
「われら」の驚くべき多様性

〈評者〉大石周平



使徒信条の歴史  
本城仰太著



使徒信条に凝縮された、世界共通の信仰要約は、一朝一夕で現在のカタチになったわけではありませんでした。本書からその成立史を学ぶ人は、一人称単数で「われ信ず」と告白する声が多く、多くの証人たちの声に雲のように囲まれていたことに気づかされるはずですが。

全六章からなる本書は、信仰告白が聖書的伝統だとの確認に始まります(第一章)。白眉はもちろん、使徒信条成立史の概説です(第二―四章)。その後、宗教改革時代を経て日本にまで至る受谷史が見渡されます(第五―六章)。まずは、第四章末尾の「使徒信条成立史のまとめ」を読んだうえで全体に向かうと、九世紀に文言が統一され、一世紀紀までに世界信条となる歴史の流れが分かりやすくなります。

本書によれば、新約時代以来の洗礼時の実践が、諸信条

比べて格段に読みやすい一般向けの本書ですが、それでいて、使徒信条の起源に関しケリーが依拠する定説を覆す、最新の研究が踏まえられます。いわく三世紀由来とされたある写本の信憑性が疑われた結果、四世紀までの直接証言がなくなったのです。本城仰太氏が、博士課程での研究を踏まえ、牧師の実践の傍ら地道に発表を重ねられたことと併せ、日本における信条史研究に本書が果たす寄与にはきわめて大きなものがあります。

使徒がひとり一言ずつ語り遺した信条が由来だとする伝説が、人文主義者によって否定されてから五八〇年、今また聖書と使徒信条を結ぶ手がかりが、史的に厳密に批判されています。これはしかし教会にとって、多様な告白的伝統に視野を開く契機です。本書では、中世の典礼統一化以

に展開します。紀元二―三世紀には、「信仰の基準」と呼ばれる三一の枠組をもった口伝要綱が存在しました。文言は流動的ですが一定の形式をもち、異端反駁が必要な文脈でカノンのな(正統性の物差し)役割も果たしました。一方、使徒信条の起源については多くが不透明なままです。原型とされる「古ローマ信条」(R)の存在は、五世紀のルフイヌス『信条講解』以降でなければ証拠づけられませんが。キリスト教公認前後、四世紀までの間に、東方に「書かれた信条」が生まれ、教理論争の火で練られた言葉が西方でも「われら」(＝公会議)の信条」となりました。その頃のRに先立つ信条は、どんな文言だったのか。ヴェストラやキンツイヒといった学者の新説を紹介する本書は、その謎解きへの心躍る参与をうながす招待状でもあります。従来、邦訳もあるケリーの学術書が信条史の権威でした。

前に唱え歌われた、欧州・アフリカ・アジアの「地域信条」の豊かさとも印象的でした。

なお、フォン・ラート以後の旧約学による聖書成立史の新たな知見(申二六章が「最古の信仰告白」か問われる)や、一六世紀の「三要文」理解に関わる地域別の研究動向、あるいは日本基督教団以外の教派的実践を今後加味すれば、「われら」という線引きの一人称を、さらに批判的かつ健全に吟味できるでしょう。今後の著者の研究と、学際的な共同作業に期待します。また何より教会において、使徒信条が本来の豊かさや力強さを取り戻すことに希望を得て、神と人の前に「われ信ず」と心から告白する一人でありたいと願います。

(おおいし・しゅうへい)日本キリスト教会多摩地域教会牧師

(四六判・一七四頁・定価一九八〇円・教文館)



**烈しく攻める者がこれを奪うⅡ**  
新約学論文・講演集  
住谷眞  
Makoto Sumitani



『聖書協会共同訳』の  
新約担当翻訳者・  
編集委員であった著者が、  
心血を注いで取り組んだ  
聖書翻訳の重要な箇所  
の新しい解釈と翻訳を論じた  
気鋭の論文・講演集。

A5判・上製・函入  
定価 4180 [本体 3800 + 税] 円  
ISBN978-4-86325-148-9



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

## 無神論を超えて進む 実証的研究の最前線

〈評者〉 芦名定道



なぜ子どもは  
神を信じるのか？  
人間の宗教性の心理学的研究

なぜ子どもは  
神を信じるのか？  
人間の宗教性の心理学的研究  
J・L・バレット著  
松島公望監訳  
矢吹理恵、荒川歩編訳



「心の時代」とも言われる現代。心は現代と宗教とを繋ぐキーワードであり、実際、宗教と心は緊密な関係にある。ところが、日本では宗教を理解するために心の科学である心理学を参考にする人は必ずしも多くないように思われる。それは、無神論的心理学（フロイトからドーキンスまで）のイメージが強いからかもしれない。しかし、科学的論拠（実験から得られたエビデンス）に基づく心理学の議論は宗教を理解する上で無意味であるどころか、きわめて有益であることを明解に示す文献が出版された。心理学に基づく宗教理解に関心のある人に、あるいはそれに懐疑的な人にも、ぜひ読んでいただきたい一冊である。

まず第1部「エビデンス」であるが、著者たちの心理学実験から得られたエビデンスに基づく結論は「神を信じることは自然なこと」と集約できる。実験が示すところによれば、幼い子どもは周囲の世界に積極的に行為者を探そうとし、出来事を行為者によって引き起こされたものとして見る自然的な傾向がある。そして世界の出来事に目的・意図（デザイン）を読み取り、デザインからデザイナーの存在を直観的に想定する。「子どもが自分の属する文化や宗教集団の特定の神々について学ぶ前に、基本的な構成要素は全て整って」おり（二一三頁）、子どもは「生まれながらの信仰者」なのである。これは自然宗教（宗教一般への強い自然的傾向）と言い換えられる。

本書は、実験から得られた成果を子どもへの宗教についてのエビデンスとしてまとめ（第1部）、このエビデンスから明らかになる知見を論じている（第2部）。

以上の議論はエビデンスに基づくものでありきわめて説得的である。しかし、それだけではない。読者は自分の体験（親として子どもと接して得た体験）と照らし合わせることによって本書の議論を読み進めることができる。

第2部「エビデンスが指し示すこと」では、エビデンスから帰結する重要な知見が示される。まず「神を信じることは自然なこと」から帰結するのは、無神論は不自然だということである——自然宗教に対して言えば神学も不自然ではあるが。一九世紀以来、欧米ではさまざまな無神論が発生し、西欧的近代社会の進展とともに世界に広がった。しかし、「教え込み仮説」（子どもが宗教を信じるのは親など大人の教え込みによる）などは「一昔前の子ども心の見方」、「少なくとも三〇年以上過去の」学説に依拠しており（二六九頁）、本書のエビデンスによって論拠を大幅に失ってしまった。本書は、さらに信仰を持っている親が子

どもに信仰を伝える意義についても重要な示唆を与えてくれる。

現在日本では、宗教二世の問題が大きな関心を集めているが、本書では、親が子どもに信仰を教えることは虐待などではなく、むしろ子どもに教えない方が子どもの健全な成長にとって有害であることが論じられている。避けるべきは、「親が子どもによく練られていない概念を教え、子どもがそれを批判的に吟味することを許さない」といった誤った方法である。これが宗教二世の問題点にほかならない。

日本においても本書が紹介するような心理学的研究が今後普及することによって、宗教についての理解が深まることを期待したい。

（あしな・さだみち 関西学院大学神学部教授  
A5判・二七〇頁・定価二九七〇円・教文館



## アジアの視点で読む ルターの小教理問答

J・P・ラジャシエカー 編著  
宮本 新訳

●四六判並製 定価一〇〇〇円

本書は、アジアを背景を持つ六名の神学者によって、ルターの小教理問答をアジアの視点で文脈的に読んだものである。アジアの現実、特に宗教多元主義、また教会が直面している幅広い社会問題（貧困、家父長制、不平等、生態学的危機）を考慮しつつ、教理問答の意味と重要性を再認識するための試みでもある。

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

## 二―三世紀の 護教論運動の頂点

〔評者〕津田謙治



キリスト教教父著作集  
第10巻 オリゲネス5  
ケルソス駁論Ⅲ  
オリゲネス著  
出村みや子訳



地中海各地に拡大するキリスト教に対し、異教の哲学者ケルソスは、この宗教の論駁を目的として一七〇年頃に『真正な教え』を著した。中期プラトン主義的な教養をもったケルソスは、哲学的思弁によってキリスト教の教説の非合理性を指摘するのみならず、作中にあるユダヤ人を登場させ、この人物にマリアを姦通者として語らせることでキリストの処女降誕を否定し、冒瀆的な議論を展開した。ケルソス没後の二四〇年代後半に、恐らくカエサリアでこの書の駁論を著したのがオリゲネスである。

本書『オリゲネス5 ケルソス駁論Ⅲ』は、ギリシア語原著で全八巻ある『ケルソス駁論』のうち、第六巻から第八巻の翻訳を収録したものとなっている。尚、既に教文館から出版されている第一巻から第五巻まで（『ケルソス駁論Ⅰ』一九八七年、『ケルソス駁論Ⅱ』一九九七年）の翻

訳と同様、訳者は出村みや子氏である。前巻の刊行から四半世紀を経て、古代の貴重な論争的著作が最後の巻まで日本語で読めるようになったことを、まずは大きな喜びとしたい。

オリゲネスは聖書解釈や教義的な著作を数多く書いたとされるが、死後数百年を経て異端宣告を受けたため、限られた著作しか我々には残されていない。その中でも、初期の重要な著作『原理論』（『諸原理について』）などが各巻ごとにある程度明確な主題が据えられているのに対し、本書『ケルソス駁論』は各巻それぞれの議題は特に細分化されておらず、全巻を通じて統一的にケルソスの議論への反論が展開されている。しかし、ある程度の傾向性は指摘することは可能であり、例えば先に挙げた作中のあるユダヤ人に関する議論は『ケルソス駁論Ⅲ』の範囲ではあまり見

られず、ここではケルソス自身の誤った聖書解釈や哲学的教説を彼の『真正な教え』をもとに吟味し、オリゲネスにとって適切と思われる解釈が反証として取り上げられている。具体的には、神が創造の七日目に仕事から離れたことを、ケルソスは下手な職人が疲れ切るように神が休みを必要としたと解するのに対し、オリゲネスは六日間働いたすべての人々が神と共に祝うことを主眼として提示している（六・六一）。また、ケルソスが「神はどうして悪しきものを創造するのか」と述べたのに対し、オリゲネスは言葉の本来的な意味での悪を神は創造しておらず、また便宜的に悪と呼ばれる物体的な悪については、神はこれらを通じて人々を回心に導くと説明する（六・五五―五七）。尚、ケルソスの批判を取り上げる際に、プラトン主義やストア主義

の考え方が頻繁に参照されており、オリゲネスはそれを一方的に切り捨てるのではなく、こうした教説に従って哲学的思考をしていると公言する者が「神を知りながら……：感謝することもせず、かえってむなしい思いにふけり、心が鈍くなった」と指摘している（七・四七）。

本書の訳文は、多種多様な諸哲学などの複雑な議論が含まれているにもかかわらず、既刊の部分も含めて読みやすく、ケッチャウの註釈やチャドウィックの英訳、ボレーの希仏対訳など複数の資料からいずれかに偏ることなく訳注が付けられている。オリゲネスの思想は、特に四世紀以降の教理史を辿るにあたって不可欠かつ重要なものであり、本書が広く読まれることを願うものである。

（つだ・けんじ）京都大学大学院教授  
（A5判・二九〇頁・定価六四九〇円・教文館）

ヨベルの新作・近刊案内

新書判上製・二四八頁・一六五〇円

### M・ブーバー 正と悪をめぐる『詩篇』黙想

## 義を求めぬ祈り

稲村秀一 〔訳著〕

『不朽のキリスト教古典双書』シリーズ第一弾！  
邪悪な者はなぜ富み栄えるのか？！ 真実な者の  
訴えはなぜ聴かれないのか？ 神は身を隠したま  
まなのか？ 古典的な問いと神不在の現代世界の  
苦悩とが詩篇を通してシンクロし、新たな光明  
が照らし始める。「我と汝」で知られるブーバ  
ーの隠れた名著 本邦初訳！ 付録「神の蝕」

大貫隆 ナグ・ハマディ文書からヨナスまで

## グノーシス研究拾遺

四六判上製・二五五頁・  
6月刊行予定二七五〇円

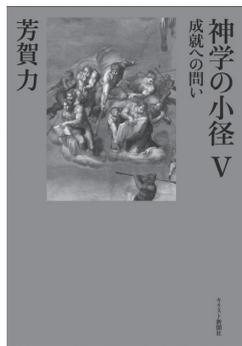
グノーシス研究拾遺

拾遺―これほど似つかわしい言葉があるう  
か。グノーシス主義の研究は新約聖書研究に  
とって不可欠・不可分の関係にあるという信  
念から日本のグノーシス研究を長く牽引し  
てきた著者が、ナグ・ハマディ文書の全体像  
からヨナスの『グノーシス』と古代末期の精  
神』までをつぶさに追跡し、その研究に散り  
ばめられていた欠片を拾い集めた待望の書。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

### 物語る教会の、 説教としての教義学

〈評者〉朝岡 勝



芳賀力

### 神学の小径 V

成就の問い

芳賀 力著



今年二月一〇日、ライブ配信された芳賀力先生の東京神学大学最終講義を聴きながら、先生が歩まれた「神学の小径」に思いを馳せました。「小径」とのタイトルとは対照的な、全五巻約二千頁に及ぶシリーズの性格を評者なりに表現するならば、「父・子・聖霊なる三位一体の生ける神の御業を、神の語りである啓示に基づき、歴史にあらわれた神の語りの道筋に即し、教会共同体の文法に従い、世界に散らばる小さな物語と対峙し、豊富な神学的知識と強靱な神学的思惟をもって語り抜いた、神の語りに応答しつつ旅する『物語る教会』としての教義学」となるでしょうか。

最終巻となる本書では、「成就への問い」として教会論、聖化論、終末論が扱われます。「完成への問い」との構想が「成就へと問い」と変更された経緯が第四巻の「あとがき」に記されており、そこには神の国の完成に向けた神学

の未完性と途上性、開放性と、神の国の「すでに」と「いまだ」の二重性が示唆されています。第一巻で「教会は、神の大きな業を世に向かって宣べ伝える物語る教会（エクレシア・ナランス）」として誕生した。それは、終末において起こるであろうと預言されていたことの成就である（一八頁）と語り、本巻では「終末的信仰とは、キリストによって始められた神の国の成就を端的に信じることにほかならない。それ故、中間時を生きる私たちの最後の問いは、成就への問いとなる」（四三二頁）とされます。

そこで成就への問いは、神義論的問いから始められます。「キリストにおいて救いがすでに起こったというのに、なぜ私たちはまだ嘆きの谷の中にいるのだろうか。なぜ私たちの教義学は、救済への問い（V巻）をもって終わらずに、なお成就への問い（V巻）を待たねばならないのか。それ

は、まだ神の国が完全な仕方では到来していないからである」（二四頁）と言われ、その中間時を生きつつ、聖書に基づく「預言者的『使徒的洞察力』」をもってこの世界を読み解く「希望の解釈学」が必要とされると読者に語ります。そこから二つの命題、「苦難は神関係を純化し、救済への問いを自覚めさせる」（二二頁）、「苦難は神関係を濃密化し、御子と聖霊を通して義認と聖化に与らせる」（二四頁）、を示し、命題三として「苦難は神関係をアドベント化し、世界を救済待望的にする」（三〇頁）ことを示します。これこそが本書の後半部の終末論の基調となっています。

著者は、救済史の担い手としての教会は、神の国の成就に向かつて、身体と生命、労働と文化、結婚と家庭、国家と政治、教会と礼拝のあらゆる分野において聖化の途上を

歩み、やがて完成の時に喜びの祝宴にあずかると言い、それゆえに「教会は世界の中でのこの希望の砦である」（三九一頁）と結びます。本書は読者がこの希望に支えられて小径を辿り、踏み固めることで、やがて一つの確かな道となり、それをもって「物語る教会」が建て上げられるようにと招くのです。こうして終わりまで読み進めてみて思うのは、「これは説教としての教義学だ」ということです。

最後に、各章で本論に続いて記される「ノート」、「幕間のインテルメッツォ（間奏曲）」、「あとがきの命題集」、そして各巻巻末の通算三三五問の「信仰の手引き」。これが一つにまとめられることも評者のひそかな願いです。

（あさおか・まさる 東京キリスト教学園理事長・学園長、市原平安教会牧師）

**ヨベルの新刊案内**

**「敵」に居場所を** **ルイ・ギグリオ**  
ヤバイ奴 田尻潤子訳  
あなたの人生を変える 詩編23編からの発見  
四六判上製・四六頁・一八七〇円

「死の影の谷」だけじゃない！「あなたは敵の  
見ている前で、わたしのために食事を調え  
……」（詩編23）「そんなのムリ」「逃げ道はな  
い」「あつちのほうがかかった」……こうし  
た思いがあなたの「敵」ヤバイ奴（誘惑する者）  
なのだ！主とあなたの食卓に「敵」を着か  
せてはならない。あなたの人生を見直す？！

**遠藤勝信 愛の心を育む**  
東京女子大学 教授  
大学チャペルでのキリスト教講話  
新書判・二六頁・SS（サービス・アンド・スクリアフェイス 権性  
と奉仕）精神で現代に愛を育む、紡ぐ。「大学  
に来てはじめてキリスト教に触れる」という  
学生への水先案内人となった著者が語るアメ  
イジング・バイブル・ワールド！人生を生  
き抜く指針となり道標となる聖書の言葉をそ  
の柔らかなまじりに語りかける30話を厳選

**愛の心を育む**  
遠藤勝信著

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

祈りへ導く注解書

〈評者〉 吉田 隆



コンパクト聖書注解  
コリント人への  
第一の手紙Ⅱ・Ⅲ  
H・W・ホーランドル著  
池永倫明訳



もし聖書テキストそのものの解釈がこれだけ多くのキリスト教会の分裂を招いたとするならば、今日ほどそれを乗り越える機会が与えられている時代はないと思う。新約聖書に限って言えば、そこに含まれる二七の古代文書群を理解するための方法論がかつてないほど共有されてきているからである。

もちろん事柄はそれほど単純ではないのだが、本書を読むとそんな感じにさせられる。聖書テキストの解説にどこまでも歴史的に肉迫する凄みと、それによって指し示されるテキストを超えるものへの畏敬と喜びを同時に感じさせてくれる注解だからである。

本書は、すでに二〇巻を超えて邦訳出版されてきた『コンパクト聖書注解』シリーズの最新刊（二巻）である。同シリーズは、幅広い読者層を対象に、オランダ聖書学界の

第一線で活躍する著名な学者たちによる標準的聖書注解である。日本ではあまり馴染みのないオランダ聖書学の成果を、読みやすい日本語で知ることができるとは実にありがたい。

標準的であることは、しかし、平板な注解ということの意味しない。本書によれば、聖書解釈の目的は、聖書記者が「彼のテキストで何を意図し、いかなる『使信』を読者たちに伝達しようとするかを見出すこと」にある（I巻二四頁）のだが、そのためにはパウロとコリントのキリスト者たちを取り囲んでいた社会の空気を感じることに極めて重要になる。

その結果、本来なら何十頁にもわたる脚注が付くであろう紀元一世紀前後のローマ・ギリシア・ユダヤの膨大な聖書外資料の中でも最も重要かつ適切なものが、注解に多数

言及または引用されることとなる。

こうして、この注解に導かれる読者は、港町コリントの雑踏の片隅に集まっては共に礼拝をしている信徒たち一人ひとりに語りかける、生身のパウロの言葉の強さや優しさ、そのため息さえも感じ取る。誰よりも訳者自身が強く感じたことは、「当時のコリント教会を取りまく圧倒的な異教社会の気圧であり、またその気圧に気付かぬまま生きていくコリントのキリスト者の姿であり、そのことは現代の日本社会に生きるわれわれを逆照射する」（II巻一八九頁）と記されているとおりである。

訳者の池永氏は本シリーズに限ってもすでに五冊以上の注解を訳された日本キリスト教会の引退教師であられるが、訳した後、個人的感想としてパウロ自身に語りかけた次の言葉に、評者は打たれた。

「慈父のような使徒パウロ先生！ あなたのコリント教

会への勧告の言葉に照らされて、キリストより委託された福音宣教と教会形成がどんなに大切であり、尊いわざであることかよくわかり、自分をかえりみて、なんと貧しく乏しい応答をしてきたことでしょうか。また時代の非福音的（異教主義的）な気圧に無自覚に妥協したことでしょうか。主をかしらとする信仰共同体を希望に立ってこの地上に形成することが、主の大きな委託であり、感謝すべき事柄であるのを自覚し、祈り、仕える思いを益々お与えください。これからも生のある限り、そのために仕えさせてください」（II巻一八九―一九〇頁）。

聖書記者をリアルによりみがえらせる優れた注解は、このような祈りに導くものなのだ。

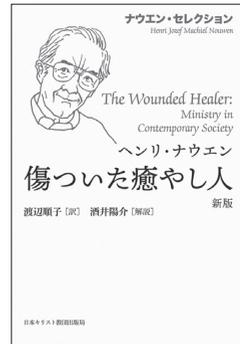
（よしだ・たかし 神戸改革派神学校校長）

〔Ⅱ〕四六判・一九二頁・定価三〇八〇円・教文館

〔Ⅲ〕四六判・二八二頁・定価四〇七〇円・教文館

## 20世紀を代表するキリスト教書 胸打つ新訳で登場!

〈評者〉 関谷共美



ナウエン・セレクション  
傷ついた癒やし人  
新版



ヘンリ・ナウエン著  
渡辺順子訳  
酒井陽介解説

一言一句に新たな命が吹き入れられたヘンリ・ナウエン著「傷ついた癒やし人」の胸打つ新訳が刊行された。本書の核心は〈援助者の自己理解と再生〉にある。

近年いのちと向き合う現場では、対人援助職者のバーンアウト（燃えつき症候群）が深刻な課題となっている。対人援助職者のみならず、家族や友人の病や死、老いに直面する人の心の奥底には無力感や罪責感、怒りや絶望、悲しみ、虚しさなど為すすべもない喪失感が深く沈殿していく。「現代社会において牧会者（ミニスター）「援助者」であるとは、いったい何を意味するのだろうか」（11ページ、「」内評者）。この「意味」への問いは、現代に生きるすべての援助者の悲痛な叫びである。

一九七二年初版の本書は、この「意味」探求の道筋をカール・ロジャーズ（臨床心理学）やデイヴィッド・リール「自分の傷を癒やし」の源とする方法をより深く理解することなしには「他者を癒やすことはできない。傷ついた他者に関わる出発点とは「苦しみによって傷つけられた（自分の）心」を知ることであり、「その」心から出た行為ではないのであれば、その奉仕は本物とは見なされないだろう」（13ページ）。なにより「他者に注意を払う」ためには「自分の生の中心を自分の心のなかに見出さなければならぬ」（133～134ページ）と著者は述べる。自己の喪失に創造的に向き合い、そこに意味を見出していく過程（体験）にこそ、他者の喪失を支える豊かな源泉があることを本書は一貫して語っている。

「私たちの孤独の傷は本当に深い」（128ページ）。傷口からほとぼり出るようなナウエンの言葉に評者は心打たれる。本書の生命力は、自らの霊的側面と性的指向に悩み葛藤し、傷つき、その傷に包帯を巻きながら（120～121ページ）悲しむ人に寄り添い続けたナウエンの生き様にあり、自分の心を見つめ、その暗闇の深淵から神を見上げて「生ける真理」（142ページ）に触れたナウエンその人のナラティブ（物語）にこそある。

「自分自身の痛みを深く理解することによって、私たちは自分の弱さを力に変えることができる」（129ページ）と

スマン（社会科学）、ロバート・リフトン（精神医学）、ジェイムズ・ヒルマン（精神分析）ら当時最先端の科学的・臨床的研究成果をふまえて提示しているゆえに、コンテキストの変遷にもかかわらず今なおその本質は色あせることがない。

著者によると、「傷ついた癒やし人」とは「自己実現あるいは自己達成の概念とは矛盾せず、むしろそれを深め、広げる」概念である（131ページ）。この主張は、人間の喪失（*crisis*）を見つめ続け悲嘆研究にパラダイムシフトをもたらしたメンフィス大学教授ロバート・A・ニーマイアーの提示する「悲しむことは、喪失によって揺らいだ意味世界の再確認、再構成を必然的にもたらすこと」という概念と深く関連する。いずれも喪失の〈有益性〉に注目し〈喪失後の成長〉の可能性を説いている。

いう著者の言葉は、キリストゆえに自己の意味を喪失し、キリストゆえに自己の意味を再生したパウロの言葉に響き合う。「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。……むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。……なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」（Ⅱコリント12・9～10）。

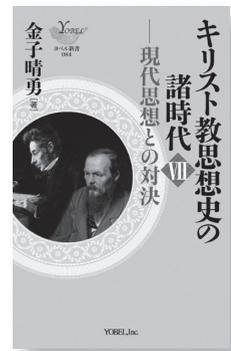
たとえ弱く無力な私たちであっても、恐れず自己の中心へと向かいそこに沈潜する孤独に触れるとき、「私たちがより大きな心を持つ御方」の業を教えられる。「生きるとは愛されるという意味なのだ、私たちは知るようになる」（135ページ）。痛みから湧き出る著者の言葉の背後から、「それでよい」という神の語りかけが聞こえるような一書である。生きる「意味」を求める多くの方に一読を薦めた

い。  
（せきや・ともみ 日本基督教団南大阪教会伝道師、公認心理師、  
精神保健福祉士）

（四六判・一六八頁・定価一九八〇円・日本キリスト教団出版局）

キリスト教思想史を読み継ぎ・語の継ぐ  
意義を「人間学」の視点から解明

〈評者〉 阿部善彦



キリスト教思想史の  
諸時代Ⅶ  
現代思想との対決  
金子晴勇著



同書をもって『キリスト教思想史の諸時代』（全七巻）が完結した。全七巻を貫く「キリスト教思想史」というテーマについて、第一巻「序論」では「思想史は人間学の宝庫である」と述べられる。それに従えば全七巻の一連の思想史解明は「人間とは何か」を根本的に問い直すものである。著者を全七巻の完結にまで導いた「人間」をめぐる問題意識の深い部分はこの第七巻でさらに研ぎ澄まされる。それは著者が生きてきた時代、歩んできた研究生活の実存の体験に裏づけられ、深められてきた人間をめぐる今日の状況の徹底的な把握によるものであつて第七巻の「はじめに」のほか随所で明らかにされる。なかでも第七巻の第一章「世俗化とは何か」は本シリーズ全体を見通す上で重要である。

「世俗化」は信仰生活の回復・刷新を求めた宗教改革と

よつて、信仰は君主が領民・国民に強制的に課すものとなり、支配体制に組み込まれた教会は、個人の内的信仰の受け皿としての役割や社会正義を求める批判的性格を急速に失つていった。この点は本書のもう一つのテーマであるアウシュヴィッツの審問という現代の根本問題にも通じるもので、その問題性は、本書第八章「ヒトラーのファッシズムとの対決——ボンヘッファーとヴェイユ」および「談話室・ヒトラーの批判者と迎合者」で論じられる。こうした近代世界の世俗化の過程において、宗教の社会的・文化的意義が希薄・空洞化する一方で、それを埋め合わせるように、自らの意志的・理性的・合理的能力によって自律的に自己を形成・陶冶する教養文化が開花し、読書、趣味、学問が盛んになり、キリスト教や信仰への依存・従属から目

ともに生じる事態である。矛盾するように見えるこの事態がどのように進むのかというと、マルティン・ルターの職業召命説に顕著であるように信仰生活から世俗生活を分離・切断するのではなく、むしろ、聖化して結合することが宗教改革を通じてかつてない仕方では推奨・推進され、そこにキリスト教や宗教を肯定する「世俗化」が生じる。しかし、その世俗化の過程に近代的自己・近代的個人主義の性格が増し加わると、信仰生活を内面的・個人的なものとして追求する動きが一転して、内面的・個人的なものから解放する自由・自律を追求する真逆の動きが加速し、キリスト教を否定的に捉えて社会や文化から排除する、脱宗教化・非宗教化的な「世俗化」が生じる。ここに「世俗化の両義性」が見られる。

また近代諸国に見られる領邦教会制度や国教会制度に

覚めた啓蒙主義がもてはやされる脱宗教的・非宗教的世俗文化が定着する（ロマン主義、ドイツ観念論もそれに含まれる）。

しかし信仰なしで理性などの人間的能力のみによって自律した個人という近代的人間は、果たして真に人間的なものでありうるのか。キリスト教思想史を古代・中世に遡れば、アウグスティヌスの『告白』にあるように人間は神に呼びかけ「あなたに向けて造られ」「あなたにおいて安らうまで」安らぎを得ることがない存在であり、そこには、自分ひとりでは自分自身を存在させることも、満足させることもできない根源的な渇きについての強烈な自覚があった（本シリーズ第二巻第三章参照）。しかし今や近代人は自己の人間的能力だけを根拠とするあまり神も他者も排除

物語る教会教義学シリーズ  
ここに堂々完結!

神学の  
小径 V

成就への問い

東京神学大学前学長  
芳賀力 著



中間時を生きるわたしたちは、  
否定的なものに囲まれてもな  
お希望を抱くことができる！  
生命、労働、結婚、政治、教会、  
神の国……。私たちの歩みの  
すべてを、終末から降り注ぐ  
光のもとで物語るシリーズ最  
終刊。

A5判・434頁・定価5,500円（税込）

▶『神学の小径』シリーズ  
好評発売中

- I 啓示への問い【聖書論】
- II 神への問い【神論/三位一体論】
- III 創造への問い【創造論】
- IV 救済への問い【救済論】

キリスト新聞社 since 1946  
162-0814東京都新宿区新小川町9-1  
TEL 03-5579-2432

する「排他的な自律」に至り、自己を神の代わりに絶対化するし、もはや躊躇うことなく理性的・意志的能力を最大限に活用して他者を蹂躪する。この傲慢で「排他的な自律」の出現に著者は古代・中世キリスト教思想世界との断絶を見るとき、「近代人の運命を破滅」へと導いた「元凶」を見る（第七卷「はじめに」参照）。

終焉を迎えた古代・中世キリスト教思想世界とともに近代世界から退場したものは人間の無能・無力の自覚であろう。被造物として人間は自己自身で存在を造り出せないという根源的な無能・無力を抱える。また、神の似姿に造られたものとして、神との関係なしに自己自身だけで自己の存在意味・幸福を実現できないという根源的な無能・無力を抱える。被造性さらには神の似姿であることによって印づけられた人間のこのいかんともしがたい根源的な無能・無力の深淵に立たされ、うめき、なげき、へりくだるとき、人間は自らの霊性的次元の最深部に触れるのであり、そこにアウグスティヌスの神への告白・賛美が生まれ、溢れ出る恩寵に満たされた人間本性の完成・救済の道行がひらかれる。しかし神が死んだ近代人はもはや自らの無能・無力を自覚し訴える宛先を持たず、恩寵と霊性的次元を拒絶し、神も他者もなく独りでその無能・無力を抱え、自己のみを

そうした近現代の人間による人間的尊厳の貶めを通じて人間自身が自分から切り捨ててきたものは、古代・中世世界そして宗教改革および敬虔主義の思想に息づいてきた人間の霊性的次元、そして、神と他者に呼びかけ真理を求めて対話する交わりであり、それは本シリーズ第一巻から第六巻を貫く中心テーマに他ならない。第七巻では近現代の問題状況の中で苦闘した哲学者・神学者の思想を通じて、霊性的次元と対話と交わりの人間学的意義が論じられる。著者はこれら全体を読み継ぎ・語り継がれるべき古典・名著の豊富な引用とともにわたしたちに贈り届けた。そのために著者と志を同じくする出版・編集者の存在が不可欠であったのはいうまでもない。困難な出版状況の中でこのような著作集が生み出されたことに感謝をささげつつ、わたしたちがキリスト教思想史を読み継ぎ・語り継ぐ今日的な意義を多くの読者とともにつとめたい。

（あべ・よしひこ）立教大学文学部キリスト教学科教授  
（新書判・二八〇頁・定価一三三〇円・ヨベル）

（本巻全7巻完結・平均二七二頁・各巻定価一三三〇円・別巻2冊は編集集中）

絶対化して、神がいなければ全てが自由であるという虚無的自由・エゴイズムに身を委ね自己をさらに虚無化し、その虚無にアウシュヴィッツという近代的根源悪が炸裂する（第七巻第九章「ヨーロッパのニヒリズム」および「談話室・ドストエフスキの『悪霊』を読む」参照）。

確かに、近代的な合理主義、科学技術、政治経済はこれまでになく人間の活動可能性を拡張した。しかし何のため人間は存在し、何のために生きるのか。近代人は人間的能力として最高のものとされる理性や意志によって自己自身でそれに答え、実現できるとするが、果たしてそうであろうか。アウシュヴィッツが示したように、自らの理性と意志が築き上げた合理的システム、科学技術、政治経済は、かえって人間をたんなる労働生産力あるいはたんなる遺伝情報（ただし擬似科学的な優生学による）にまで還元・破壊・解体してその歯車の中に組み入れ、誇るべき人間の理性は冷徹な計算的合理性（AIによって用済みになるかもしれない）に、意志の力はただ自己の信念・願望のみを盲目的に連呼しながら他者に強制し、相容れない主張には耳を閉ざして断固拒絶する頑なさ、あるいはただの偶然的恣意や自発的隷従にまで切り下げられていることを第七巻は人間学的観点から明らかにする。

「人間の自己理解の軌跡」の宝庫である

金子晴勇著 ヨーロッパ思想史に尋ねる！  
本巻全7巻完結！

キリスト教思想史の諸時代  
新書判・平均二七二頁  
各巻定価一三三〇円

- I ヨーロッパ精神の源流 既刊
- II アウグスティヌスの思想世界 既刊
- III ヨーロッパ中世の思想家たち 既刊
- IV エラスムスと教養世界 既刊
- V ルターの思索 既刊
- VI 宗教改革と近代思想 既刊
- VII 現代思想との対決 最新刊
- 別巻1 アウグスティヌスの霊性思想 次回記念
- 別巻2 アウグスティヌス『三位一体論』研究



コンパクトなサイズで充実のシリーズに期待。（1巻目書評）

著者は「ルターの人間学」（創文社）で日本学士院賞をうけた。著者の根本的な問題意識には人間への問いがあり、思想史研究を通じて人間学を発展させてきた。それが今回本書「序論 思想史は人間学の宝庫である」で明確にされ、シリーズ全体を方向づける。著者の人間への問いは今日的状況に根ざしており、だからこそ思想的に展開される。各章に付せられたコラム「談話室」は著者の仕事の舞台裏をのぞかせる。コンパクトなサイズで充実の内容であり多くの読者をえて欲しい。（阿部善彦氏「立教大学教授」）

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp 出版の手引き／呈

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F TEL 03 (3818) 4851 FAX 03 (3818) 4858 (税込)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
金子晴勇	キリスト教思想史の諸時代Ⅶ —現代思想との対決	新書	264	1,320	ヨベ	ル 3/10
及川信	イースター小品集 わたしが十字架になります	四六	216	1,540	ヨベ	ル 3/15
ユージン・H・ピーターソン著／友川榮監訳／川上直哉、斎藤顕、サム・マーチー訳	聖書に生きる366日章	A5変型	440	2,750	ヨベ	ル 3/15
東洋英和女学院大学 死生学研究所編	死生学年報2023 —死生学の拡がり	A5	193	2,750	リト	ン 3/15
川中子義勝	ハーマンにおける言葉と身体 —聖書・自然・歴史	A5	318	5,280	教文館	3/15
湯浅八郎述／田中文雄編／国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館新装版編集	民芸の心〔新装和英版〕	四六	288 + 図版16	2,200	教文館	3/22
N. T. ライト著／井出新訳	N. T. ライト新約聖書講解2 すべての人のための マタイ福音書2 —16-28章	四六	328	3,080	教文館	3/22
ロバート・キエサ訳・注解／高祖敏明、梶山義夫翻訳協力	イエズス会の規範となる 学習体系(1599年版) 〔羅和対訳〕	A5	316	4,950	教文館	3/22
小友聡	コヘレトと黙示思想	A5	320	5,500	教文館	3/24
宮平望	旧約聖書文学書 —要約と概説	A5	220	2,090	新教出版社	3/17
鬼頭葉子	動物という隣人 —共感と宗教から考える動物倫理	A5	400	5,995	新教出版社	3/24
在日本韓国YMCA編	交差するパレスチナ —新たな連帯のために	四六	208	2,640	新教出版社	3/24
棟居正	はじめてのマルコ福音書	A5	128	1,650	日本キリスト教団出版局	3/22
リチャード・B・ヘイズ著／東よしみ訳	パウロ書簡にこだまする 聖典の声 —パウロは「旧約」聖書をどう読んだか	A5	368	6,820	日本キリスト教団出版局	3/23
加藤常昭編訳	主よ、わが唇を開きたまえ —説教黙想集	A5	682	8,800	日本キリスト教団出版局	3/24
春名康範	新約聖書1日1章 —聖書通読	A5	280	3,080	日本キリスト教団出版局	3/24

既刊案内 (2023年2月～2023年3月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
本城仰太	使徒信条の歴史	四六	174	1,980	教文館	2/1
安酸敏真	「キリスト教学」の探究	A5	292	5,720	教文館	2/15
木原活信	ジョージ・ミュラーとキリスト 教社会福祉の源泉 —「天助」の思想と日本への影響	A5	304	5,060	教文館	2/22
辻直人	湯浅八郎の留学経験 —アメリカにおけるキリスト 教国際主義との出会いとその影響	A5	238	4,070	教文館	2/22
鈴木範久	聖書語から日本語へ	四六	302	3,300	教文館	2/24
堀江洋文	ハインリヒ・ブリンガー —ヨーロッパ宗教改革	菊	280	5,720	一麦出版社	2/10
松谷好明	〈ウエストミンスター信仰告白〉歴史的・分析的註解	菊	570	11,000	一麦出版社	2/14
吉村和雄	説教最後の晩餐	四六	152	1,760	キリスト新聞社	2/21
小見のぞみ	非暴力の教育 —今こそ、キリスト教教育を!	A5	136	1,760	日本キリスト教団出版局	2/21
小高毅、堀江知己訳	オリゲネス 創世記説教	A5	270	3,520	日本キリスト教団出版局	2/24
山根道公	遠藤周作探究Ⅱ 遠藤周作『深い河』を読む —マザー・テレサ、宮沢賢治と響きあう世界	A5	304	3,520	日本キリスト教団出版局	2/24
ミーシャ・リヒター作／みつじまちこ訳	エリックとマチルダ	A4変型	32	1,980	新教出版社	2/24
大頭真一	神さまの宝もの 申命記・中 —焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇7	新書	224	1,210	ヨベ	ル 2/28
ヘンリ・J・M・ナウエン著／友川榮編訳	イエスの示す道 —受難節の黙想	四六	224	1,870	ヨベ	ル 2/28
芳賀力	神学の小径Ⅴ —成就への問い	A5	434	5,500	キリスト新聞社	3/3
湊晶子	現代を生きかす 新渡戸稲造の人格教育	四六	120	1,320	キリスト新聞社	3/20
ケネス・J・デール著／谷口真理子訳／デール・パストラル・センター監訳	神はいずこに —聖なる神秘の黙想	A5	140	1,320	キリスト新聞社	3/22
関西学院大学 キリスト教と文化研究 センター編	ことばの力 —キリスト教史・神学・スピ リチュアリティ	四六	166	1,760	キリスト新聞社	3/22
荒瀬牧彦編	日本クリスチャン・ アカデミー共同研究 コロナ後の教会の可能性 —危機下で問い直す教会・礼 拝・宣教	A5	148	1,650	キリスト新聞社	3/23



# キリスト教書店大賞2023

**LGBTとキリスト教**  
20人のストーリー  
平良愛香 監修  
定価2,200円  
日本キリスト教団出版局

**オススメ!**  
清光書店 飯尾千尋さん

LGBTについて学ぼうと思いましたが、LGBTにフォーカスされている本が、20人、あるいはそれ以上の方たちの力強い信仰の詩集と感じました。マインリティ、マジョリティというボーダーではなく、キリスト者として他者と共に歩むには……を考えるきっかけになる一冊だと思います。

2022年1月~12月に出版された  
キリスト教書の中から全国の  
キリスト教書店員が大賞を選出します。

**ノミネート11作品**  
(タイトル50音順)  
価格は10%税込

**「いいね!」をクリックして  
最新情報をGET!**  
QRコードで簡単アクセス! →

**老いと祝福**  
石丸昌彦 著  
定価2,420円  
日本キリスト教団出版局

**オススメ!**  
名古屋聖文会 伊奈均志さん

病と老いはだれでも不可避です。ポジティブに生きる指針に感銘。

**使徒信条 光の武具を身に着けて**  
平野克己 著  
定価1,430円  
日本キリスト教団出版局

**オススメ!**  
東京キリスト教書店 若林弘通さん

とてもわかりやすく、使徒信条を解説しています。読書会にも最適です。

**たどりつくまで**  
ロバと三人の旅  
アン・ブース 文  
サム・アツジャー 絵  
真下弥生 訳  
定価1,650円  
新教出版社

**オススメ!**  
善隣館書店 浜田陽子さん

やわらかな絵、わずかな色彩ですが、希望を感じさせる黄色の色遣いが印象的です。真下先生の解説がすばらしく、イエス様の降誕のあとの逃避行が、現代にあっても、安住の地を求めてさまよう多くの人々の姿に重なりました。読む人に希望を与える一冊だと思います。

**どう読むか、聖書の「難解な箇所」**  
「聖書の真実」を探究する  
青野太潮 著  
定価1,320円  
ヨベル

**オススメ!**  
待農堂 市川義生さん

教会生活の中であたりまえと受けとめていた聖書理解を、改めて考えさせられる書籍。手ごろな新書版だが内容は深く、読書会等のテキストとして使用してもらいたい。

**何を信じて生きるのか**  
片柳弘史 著  
定価1,430円  
PHP 研究所

**オススメ!**  
教文館キリスト教書部 秋月美映子さん

ある若者が神父様と出会った事で、自分が抱えていた悩みや疑問を問ひかける。この若者は、あたかも私自身の胸の内を代弁してくれているかのように感じた。とても興味深く勉強になった一冊です。

**21世紀のキリスト教入門**  
一つの教会の豊かな信仰  
フスト・ゴンサレス 著  
神代真砂実/高野佳男 訳  
定価2,200円  
教文館

**オススメ!**  
沖繩キリスト教書店 川上直美さん

信仰が揺さぶられる時代。私たちの信仰告白を確かなものにするためにも読んでおきたい一冊です。教会での学び、個人の学びのための必読書!!

**ビジュアル版 はじめての聖書物語**  
サー・ダグナルム・アトリアリス 著  
フリアン・テナルバエス イラスト  
山崎正浩 訳  
定価3,520円  
創元社

**オススメ!**  
横浜キリスト教書店 高橋友彦さん

はじめて聖書を読む子ども達、そして大人にも、美しいイラスト、図版、写真にあふれた各頁を楽しく読んでいただけます。ペタランの信者にとっては、巻末の旧約、新約聖書の登場人物と語句の索引などが聖書の学びに重宝します。しかなかった装丁、リーズナブルな価格で、CSの教材やプレゼントにお奨めです。

**日々を生きる力**  
あなたを励ます聖書の言葉366  
片柳弘史 著  
定価990円  
教文館

**オススメ!**  
北九州キリストブックセンター 原口悦子さん

ハンドメイド 安価わかりやすい これだけのボリュームの内容で、1000円以下の価格です。旧約聖書続編に親しみのないプロテスタントの信者にとって、続編の聖句が新鮮に響きます!

**八木重吉の家族を詩う**  
日本キリスト教団出版局 編  
定価1,320円  
日本キリスト教団出版局

**オススメ!**  
ライフセンター新潟書店 永井美智代さん

愛する家族を残し、30歳の若さで召された八木重吉。地上での生涯は短くとも、形見として残された詩は、約100年後に生きる私たちにも、信仰とは、いのちは、家族とは、一途な一言一言を聞かれます。詩の背景や資料も記されているので、重吉の詩にはじめて触れる若い人にも、ぜひ手にとって欲しい一冊です。

**ヤバい神**  
不都合な記事による旧約聖書入門  
トーマス・レーマー 著  
白田浩一 訳  
定価2,420円  
新教出版社

**オススメ!**  
大阪キリスト教書店 美田嘉信さん

旧約聖書を解釈するために、私達は頭を悩ませます。この本は、深い信仰をもった著者により、敬虔しがちな旧約聖書に目を向けさせてくれます。

書店名	郵便番号	住所	電話	ウェブサイト	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	<a href="http://www.jp-shop.com">http://www.jp-shop.com</a>	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninkan_syouin_0530@atn00.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区新1-136 東緯線センター177F	022-223-2736	共用		fcqow@524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千歳市枝敷2-242 千歳ワタセンタービル17F	043-238-1224	043-247-3072	<a href="http://www.keisenchristian.jp">http://www.keisenchristian.jp</a>	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	<a href="http://www.kyodunkwan.co.jp">http://www.kyodunkwan.co.jp</a>	xbook@kyodunkwan.co.jp	00120-2-11357
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	<a href="http://taisonbooks.jimdo.com/">http://taisonbooks.jimdo.com/</a>	taiшиндо@com.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	<a href="http://biblehouse.jp">http://biblehouse.jp</a>	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1日ヶ坂内(弥生南門)	03-3260-5663	03-3260-5637	<a href="http://www.diglobe.ne.jp/~yodanisacs/index.html">http://www.diglobe.ne.jp/~yodanisacs/index.html</a>	tokyo@nikkhan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	<a href="http://www.diglobe.ne.jp/~yodanisacs/index.html">http://www.diglobe.ne.jp/~yodanisacs/index.html</a>	sksch@myval.diglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用		sksch@myval.diglobe.ne.jp	00560-8-51419
静岡聖文会	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	<a href="http://www.s-seibun.co.jp/">http://www.s-seibun.co.jp/</a>	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文会	464-0850	名古屋市中区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	<a href="http://nagoya-seibunshatai.coocan.jp/">http://nagoya-seibunshatai.coocan.jp/</a>	nagoya-seibunshatai@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒物口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	<a href="http://web.ytdo.net/or/people/kytdan/">http://web.ytdo.net/or/people/kytdan/</a>	kytdan@inbox.kyoto-ine.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	<a href="http://osakabooks.web.fc2.com/">http://osakabooks.web.fc2.com/</a>	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町5-9-18三彌ビル2F	078-331-7569	078-945-9388	<a href="http://kobe@nikkhan.co.jp">kobe@nikkhan.co.jp</a>	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00170-2-421390
広島聖文会	730-0841	広島市中区舟入町1-2-7	082-208-0022	082-208-0177		hselbun0951@ahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西3	090-8694-4986	050-3142-3017	<a href="http://www.geocities.jp/mesajane_1007/index.html">http://www.geocities.jp/mesajane_1007/index.html</a>	ykwb13@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	<a href="http://www.geocities.jp/mesajane_1007/index.html">http://www.geocities.jp/mesajane_1007/index.html</a>	sksch@doorkokline.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教書店	802-0022	北九州小倉北区上重野5-2-18	093-967-0321	共用		kbbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	<a href="http://www.sinsaikan.jp/">http://www.sinsaikan.jp/</a>	info@sinsaikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハルルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用	<a href="http://www.okinawachs.net">http://www.okinawachs.net</a>	k-halenyu@bible.or.jp	00160-2-18410
沖繩キリスト教書店	904-2143	沖繩県沖繩市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	<a href="https://www.okinawachs.net">https://www.okinawachs.net</a>	info@okinawachs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

# 福音と世界

2023年6月号

特集 世界教会協議会(WCC) 第11回総会  
寄稿者 川金性済、西之園路千、鄭詩温、伊勢希  
藤原佐和子、【翻訳】村瀬義史・李相勲

新連載 神と「女性的なるもの」を辿って  
西洋中世の女性神祕家たち(後藤里来)／好  
評連載 私は告白する、私の神を(長尾優)、  
地域から考える在日朝鮮人史と教会史(金耿  
昊)、グレート小林と三人の女(飯田華子)、日  
本的キリスト教」を読む(山口陽一)ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

## 編集室から

「ようやく回ってきた」。ある日、出社すると、待ちに待った本がデスクに置かれていた。何がかつて？ 今話題の『証し 日本のキリスト者』(最相葉月著・KADOKAWA)だ。「自分で買えよ」とおしかりを授けそうだが、買わなくても話題のキリスト教書はだいたいわくわくなのが出版社勤務の特権だ。一般紙にも取り上げられ、話題になっている一書なので改めて紹介することもないだろう。ノンフィクションライターが、全国の教会をめぐる、百人以上のキリスト者の半生を聞き書きしたものだ。ある牧師が収録されている教派を数えたところ、プロテスタントが八九人(内、聖公会一二人)、カトリックが二五人、オーソドックスは一三人だったそうだ。

## 予告

### 本のひろば

2023年7月号

#### 本・批評と紹介

(巻頭エッセイ) 大西晴樹、(書評) 小見のぞみ著『非暴力の教育』、辻直人著『湯浅八郎の留学経験』、小高毅、堀江知己訳『オリゲネス 創世記説教』、ヘンリー・J・M・ナウエン著『イエスの示す道』、在日本韓国YMCA編『交差するパレスチナ』、大頭真一著『神さまの宝もの』、松谷好明著『ウェストミンスター信仰告白』 歴史的・分析的註解、荒川朋子著『共に生きる「知」を求めて』他

実は筆者は正教会の信徒に未だ出会ったことがない。そんな彼らの証しに触れることができたのは幸いなことだったし、筆者から見ると少々独特な信仰観も刺激的だった。海外から来た宣教師、司祭の証しもあり、普段当然と思われていることが、いかに普遍性を持たないことなのか教えられたりもした。「この教派に、こんなことを考えている人もいるのか」と、自分が気づかず持っていた偏見に気づかされることもあった。筆者にとっては信仰というものをさらに自由に考える契機となる一書だった。本書の著者が未信者だからこそ成しえた本の力だろう。

読みだすと止まらないものだから、先日、地元の川辺で焚火をした際にも本書を持って行って読んでいた。しまった、想像が及ばなかった。真っ白な表紙がいつの間にか煤で真っ黒に……。うーん。新しいやつ買って返すか。(桑島)

# アウグスティヌス 古くて新しい物語

物語の手法で描くアウグスティヌス!

柏木貴志 著



「物語」という方法は、まるでその人の心の窓から見るように時代を見る。肌で感じるように感じる事ができます。その時、アウグスティヌスが記した膨大な文書もまた単なる紙の上の文字ではない、彼の心を理解するための言葉となり、VIVA VOX(生きた声)として語りかけてくるのです。……さあ、北アフリカの街を吹き抜ける地中海の風の中へ——今日もこの世界に吹き渡る、神の恩寵の風の中へ——一緒に旅をしてみましょー!」  
(吉田隆氏(神戸改革派神学校校長)推薦のことばより)

● 四六判・並製・200頁・定価3,080円

# マルキオン

異邦の神の福音

津田謙治 著

「異端の始祖」と呼ばれるマルキオンは、「教会の改革者」か? それとも「新しい宗教の創設者」か?

仮現論や様態論などのキリスト論、新約聖書正典の成立、グノーシスの諸概念の分析など、教理史研究に不可欠なハルナックのマルキオン研究。約一〇〇年前の著作にもかかわらず、現在でも読み継がれる古典的名著の待望の翻訳!

● A5判・上製・312頁・定価5,060円



# パラドクサ

ゼバスティアン・フランク 著  
 福原嘉一郎 訳 安藤敏眞 解説



非党派的立場から「見えざる霊の教会」を唱道したルター同時代人で、後世「近代宗教哲学の先駆者」と称された、霊性主義の代表的思想家フランクの主著。聖書における矛盾めいた不可思議弁辞(パラドクス)を集め、独自の神秘哲学を説いた古今無比の教義学的著作。本邦初の全訳!

● A5判・上製・400頁・定価3,960円

# 困惑を超えるもの

大沼隆遺稿説教集

大沼隆 著

「信仰とは、困惑があってもそれを超えて生きてゆくことである」

日本基督教団仙台川平教会主任担任教師、宮城学院宗教総主事などを務め、東北の地で五〇年にわたり伝道に奉仕した牧師が遺した説教集。膨大なノートの束から掘り上げられた、生涯をかけて福音をあかしし続けた著者による心打つ魂の言葉。

● B6判・並製・328頁・定価1,650円



# 一ペトロ口書を読む

釈義と説教

5月18日

石田学著 広大なローマ帝国の辺境で少数者の立場に置かれ、差別と迫害に苦しむキリスト者に向けて自らの信仰と倫理を力強く語る一ペトロ書。そのメッセージを、《釈義》と《説教》の2部構成で、現代の私たちに生き生きと伝える。  
◆四六判・定価2200円

# ユダヤ人も異邦人もなく

話題!



山口希生著 パウロ研究の新潮流  
信仰義認を重視する従来のパウロ理解に異議を申し立て、20世紀後半から新約学界で激しい論議を呼んでいる「パウロへの新しい視点」(NPP)。本書は19世紀のパウルから21世紀のパークレーまで解説。果たしてパウロは何を宣教したのか? 本格的NPP入門書。  
◆四六判・定価2475円

# 交差するパレスチナ

大反響

在日本韓国YMCA編

新たな連帯のために



差別の複雑な実態を明らかにし、抵抗にインスピレーションを与える「交差性」の概念を手がかりに、パレスチナに学び、パレスチナと共闘する。寄稿者ニタル・アブズルフ/金城美幸/北川真也/阿部小涼/保井啓志/中村一成/太田昌国/役重善洋/早尾貴紀。  
◆四六判・定価2640円

# コヘレトの言葉

人生を生きよ

大好評



ヴァルター・リユティ著/宍戸達訳 旧約の知恵の福音  
コヘレトはニヒリストではない! 「すべては空である」と観ずる旧約中の異色の書。しかし著者はコヘレトを、神への信仰に立って自らの人生を生きよと勧める人として読む。傑出した説教者による力強い講解!  
『説教者ソロモン』を改訳・改題して贈る。  
◆四六判・定価2310円

# 神と上帝

聖書訳語論争への新たなアプローチ

金香花著

5月25日

◆A5判・定価4400円

19世紀中国での聖書翻訳における訳語論争を手掛かりに、その後の朝鮮語と日本語における聖書翻訳とを比較、さらに、それを近年の発達めざましい聖書翻訳理論と付き合わせ、そもそも聖書翻訳とは何かに迫った意欲的な研究。

本のひろば.com



一九五七年七月一日 第三種郵便物認可  
二〇一三年六月一日発行 毎月一回一日発行  
本のひろば 第七八六号 二〇一三年六月号

発行所 〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1 一般財団法人キリスト教文書センター  
電話03-3361-6520 振替0170-511679  
発行人 金子和人 編集人 桑島大志 印刷所 モリモト印刷  
発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話03-3361-5670

定価七八円(税抜七二円) 63円  
一年分一三〇〇円(送料共)